

1.子ども食堂のリポート率が高い要因：インフラ的存在に今後求められるもの

秋山妙

第1章 はじめに

本稿は、子ども食堂の利用者の参加頻度が高いことに焦点を当てた。そして、それには何かしらの要因があるのかを調査・分析し、今後の展開を考察したものである。子ども食堂に来ている子どもやその保護者が何を求めて子ども食堂に来ているのかを考えることは、重要なことである。参加者のニーズに合わせた支援をすることが一番の支援に繋がるはずである。そこで私は、子ども食堂ができる支援を探っていきたいと考えた。

第1章では子ども食堂が広まった理由、そして現在の子ども食堂の運営形態について述べる。今回のアンケート調査で分かったことをもとにしている。第2章では、この研究をしようと考えた根拠及び使ったデータや分析方法などを明らかにした。第3章では、アンケート調査の集計を棒グラフや円グラフ化し、分析した結果をまとめた。第4章では、第3章の分析で分かったことをもとに、今後子ども食堂には何が求められるのか自らの意見を示した。そして第5章では、分析結果や自ら分かったことなどをまとめた。本稿を通して、子ども食堂に来ている人たちがどのような思いや期待をしているのか、少しでも知って頂ければ幸いである。まず始めに、子ども食堂がどのようなところかを以下で具体的に示している。

2012年から始まった子ども食堂ⁱは、現在では3,700か所以上存在する。全都道府県で増加している。子どもや地域住民が利用しやすい地域共生社会のインフラⁱⁱに近づいている。子ども食堂がこれほどまで増加した理由は二つあると言われている。

一つ目は、政府が2009年に初めて相対的貧困率（世帯所得が標準的所得の半分以下の割合）を公表したことで表面上には見えない貧困の存在が、社会的に認知されるようになったからである。もう一つの理由は、子どもの貧困層が増加していることが挙げられる。子どもの貧困世帯はひとり親の家庭が半数を占めており、孤食も併せて問題として取り上げられるようになった。

次に、2020年現在の子ども食堂の運営を紹介したい（2019年実施の今回のアンケート調査から）。

子ども食堂の多くは子どもの場合、無料で利用できることが多い。有料の場合でも100円から300円という料金が大半なため、気軽に利用しやすい。大人の利用もできることが多いが有料の場合がほとんどである。開催回数では、月1回のところが多い。人員や食材、場所の確保の問題があるため、月1回以上開催するのは困難な状況である。曜日は、土曜日や日曜日が多い。利用できる時間は、平日の場合だと17時から20時頃、土曜・日曜の場合は12時から14時頃が多い。1回あたりの子どもの人数の平均は、24.9人、大人の平均人数は15.5人である。子ども食堂の形態は地域によって様々で、活動目的も異なる。そのため、子ども食堂の明確な定義は存在しない。実際に対象者は、各子ども食堂で異なり、誰でも来て良いところは全体の6割以上である。反対に、子どもだけを対象者に行っているところは全体の約3割ほどであった。生活困窮者の子どもに限ると1割にしか満たない。これらのことから、子どもの貧困や孤食に対する問題は、親の就業状況や家庭状況が深く関連しているため、根本的な解決方法を見つけるのが難しい現状である。子ども食堂は、そういった現状を緩和できる一つの方法である。地域の居場所にもなって

いる。

第2章 研究目的と方法

今回アンケート調査の結果の中で、子どもと大人どちらも子ども食堂への参加頻度が高いことが分かった。私は、なぜ両者ともリピート率が高いのか疑問を抱いた。そのため、子ども食堂をほとんど毎回利用している子どもや大人にはそれぞれどのような要因があるのか探りたいと考えた。子ども食堂は地域の人と交流できる場であり、運営者側の方にとっては継続的に来てもらうことを望んでいるだろう。

実際にボランティアとして参加したところ、常連さんとなって毎回来ている人がいる一方で、一年に数回、あるいは一度きりで来なくなる人がいることに気づいた。また、ほとんど毎回来ている子どもは名前と顔を覚えてもらっていた。いつも来ている子どもが来ないときは、心配して連絡をとることも可能だ。これは子どもだけではなく、大人にも当てはまる。多くの子ども食堂は月に一回程度しか開催されていないが、その一回で様々な情報が得られる貴重な日だと感じた。子どもたちと食事を通じて会話をし、1ヶ月前と比べて漢字が読めたり、計算が早くなっていたり、あるいは身長が伸びていたりなど、様々な成長を感じることができる。だからこそ、子ども食堂という一つのコミュニティの場と継続的につながりがあることは重要なことだと思う。しかし、誰もが気軽に利用できることが利点ではあるが、それにより一、二回で来なくなる人もいる現状だ。月一回程度の開催を待ち望んでいる人と、都合が合えば行く人と二極化しているかもしれない。それぞれの家庭状況によって、子ども食堂の存在の意味が異なる可能性がある。

以上の問題関心から、子ども食堂をリピートするきっかけとなっていることを分析し、今後できることを考察したい。そして、少しでも多くの子どもたちやその家族に長く利用してもらいたい。

今回、愛知県内の子ども食堂 59 か所からアンケート調査の回答を得られた（名古屋市 27 か所、名古屋市以外 30 か所）。利用者の大人は 308 人、子どもは 365 人からアンケートの回答を得ることができた。

本稿では子どもと大人の方にご回答頂いたアンケートから、参加頻度、目的、家庭での親子の関心の3つに分けて注目した。そして、子どもと大人の方の子ども食堂への参加頻度が高い要因を探った。そして、単純集計とクロス集計を併せて分析した。分析するために、アンケートの他に、名古屋市市政情報の統計データの中のひとり親世帯の状況を表したデータを使用した。これらも関連付けて考察した。

第3章 研究結果

① 子ども

始めに、子どもの参加頻度、目的の分析をおこなった。

下記の図1から、子ども食堂への参加頻度は、ほとんど毎回来ている子どもが 222 人と最も多かった。ほとんど毎回利用する人が大半を占めていることから、子ども食堂へのリピート率が高いことが分かる。次いで、今回が初めて利用する子どもが 53 人と多かった。図2の子ども食堂に来ている子どもの年齢の内訳では、10歳（小学校4年生～5年生）が最も多かった。6歳から12歳までの人数が20人以上を超えている。このことか

ら、小学生の利用が多いことが分かった。

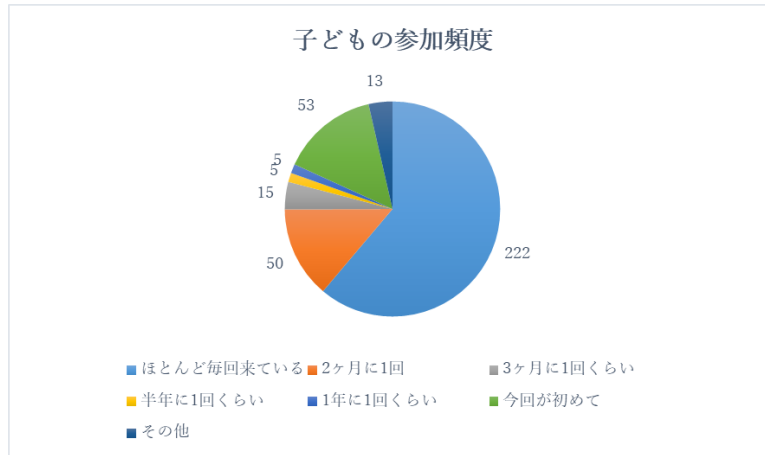


図 1 (N=363 欠損値 2)

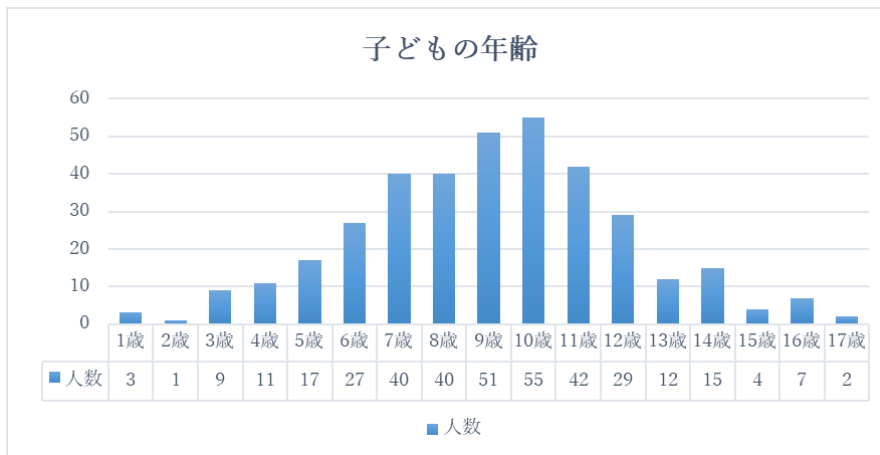


図 2 (N=365)

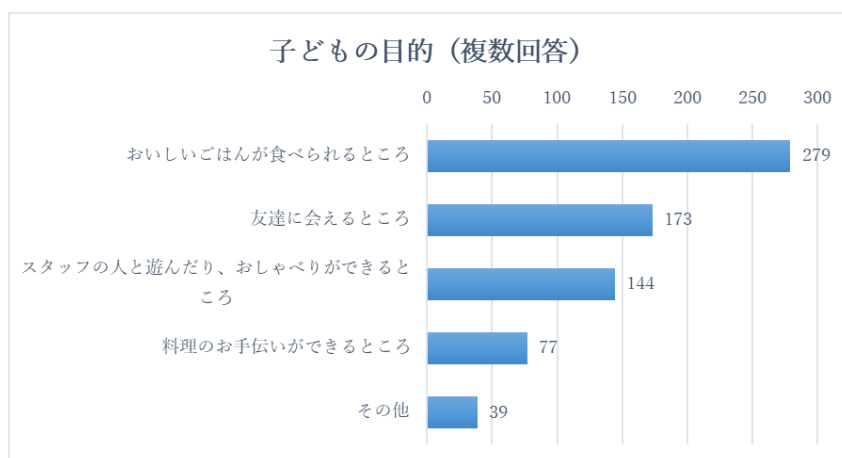


図 3 (N=712)

上記の図3から、子どもたちが子ども食堂に来る目的として最も多かったのは、おいしいごはんが食べられるからという理由で279人いた。これは全体の約7割以上を占める。次に、友だちに会えるからという理由が173人で2番目に多かった。料理のお手伝いができるから来るとい子どもは少なかった。子ども食堂のほとんどは、大人のスタッフが調理をして配膳するためだと考えられる。

下記の図4では、子ども食堂に来る目的と参加頻度をクロス集計した（子どもの調査票②問1・3）。その結果、友だちに会えるからという理由で来る子どもの参加頻度の割合が最も高いことが分かった。子どもの参加頻度と関連があるのは、おいしいごはんが食べられることよりも友だちに会えることであると分かった。

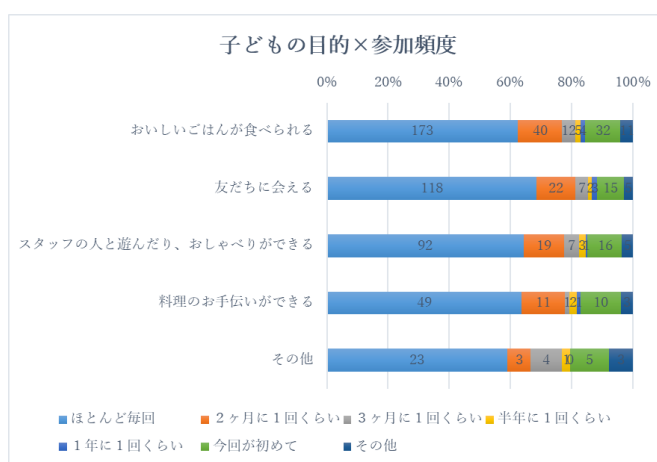


図4 (N=363 欠損値2)

② 大人

次に大人の参加状況や目的の分析をおこなった。

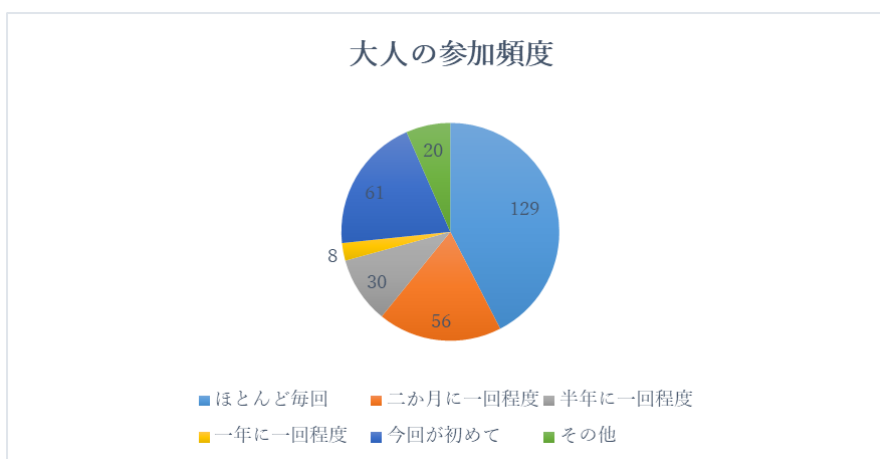


図5 (N=304 欠損値4)

上記の図5から、子どもと同じく大人もほとんど毎回来ている人が多かった。しかし、子どものほとんど毎回来ている割合が半数以上を占めていたのに対し、大人は4割程度であ

る。そのため、2ヶ月に1回や半年に1回程度で来ている人が若干多いことが分かった。この結果は、大人には子育てをしている人からひとり暮らしをしている人、そして高齢者の方など年齢や家庭環境が異なる人が含まれているからだと考えられる。

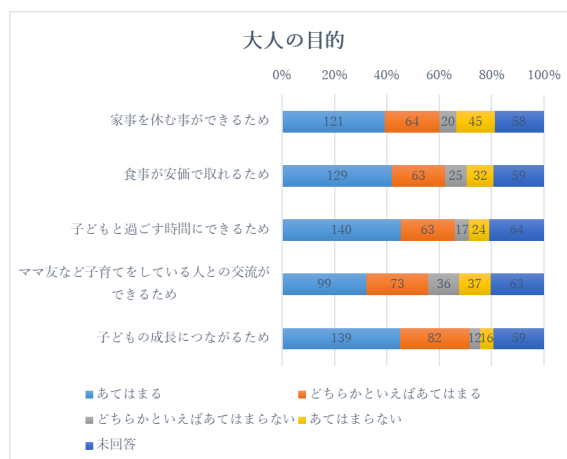


図 6

上記の図 6 から、子ども食堂に来る目的で、あてはまる・どちらかといえばあてはまるを合計した割合が最も高かったのは、子どもの成長につながるためであった。次いで、子どもと過ごす時間にできるため・食事が安価でとれるためが多かった。全体の結果はそれほど大差なかった。(N 及び欠損値は上から順に N=250 欠損値 58、N=249 欠損値 59、N=244 欠損値 64、N=245 欠損値 63、N=249 欠損値 59)

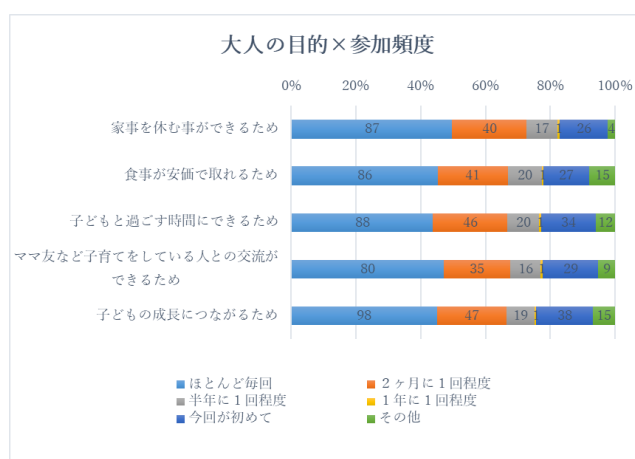


図 7 目的（あてはまる・どちらかといえばあてはまる）

上記の図 7 ではそれぞれの目的があてはまる・どちらかといえばあてはまる大人の目的と参加頻度をクロス集計したものである（大人の調査票 問 4・12）。図 8 では、それぞれの目的があてはまらない・どちらかといえばあてはまらない大人の目的と参加頻度をクロス集計したものである。(N 及び欠損値は上から順に、N=247 欠損値 61、N=241 欠損値

67、 N=241 欠損値 67、N=242 欠損値 66、N=246 欠損値 62)

まず図7では、「家事を休む事ができるため」という目的の大人が子ども食堂にほとんど毎回参加していることが分かった。次に、「ママ友など子育てをしている人との交流ができるため」という目的の大人の子ども食堂へほとんど毎回来ている割合が高かった。

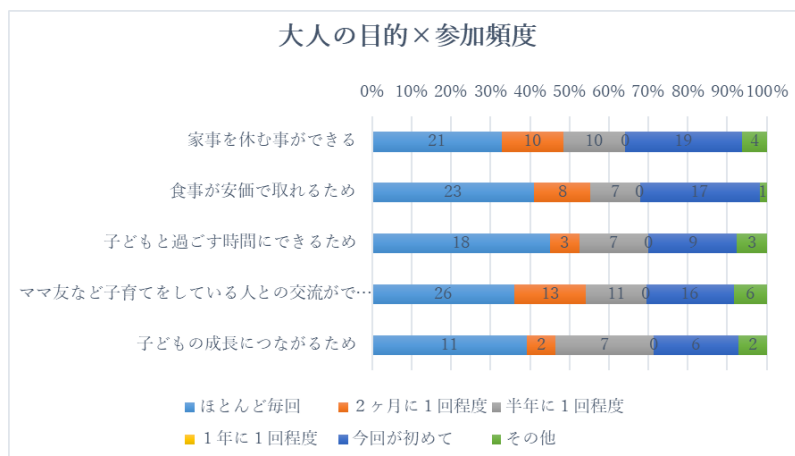


図8 目的（あてはまらない・どちらかといえばあてはまらない）

図8から、子ども食堂にほとんど毎回来ているのは「子どもと過ごす時間があるため」という目的があてはまらない大人が多かった。

これらのことから、大人は家事の負担軽減や子育てをしている人との交流などを求めて子ども食堂を頻繁に利用している人が多いことが分かった。

③子どもと親の家庭状況

次の図9から図13は、親子のふだんの生活5つと子ども食堂の参加頻度をクロス集計したものである（大人の調査票 問4・10）。

この項目は、大人の回答だけであるが、ご回答いただいたのは子育てをしている保護者の方たちである。そのため、保護者の参加+子どもの参加として考察した。

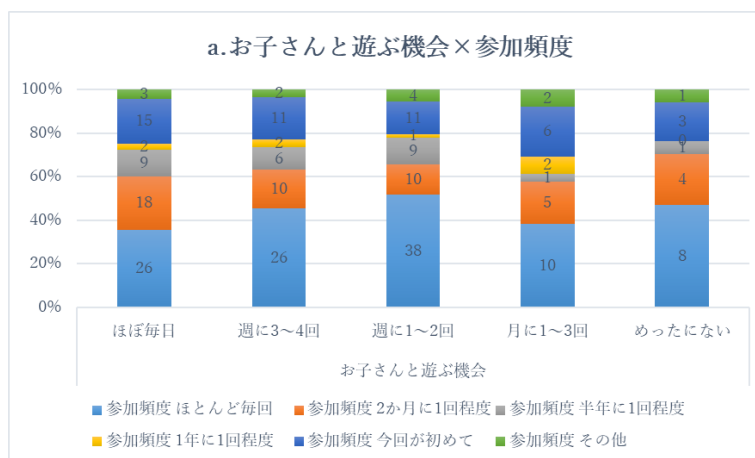


図9 (N=246 欠損値 62)

上記の図9から、お子さんと遊ぶ(趣味・スポーツ・ゲームなど)機会が週に1~2回の場合が子ども食堂へほとんど毎回参加している人が38人で最も多かった。割合から見ても最も多いことが分かった。次いで、人数に注目するとお子さんと遊ぶ機会がほぼ毎日・週に3~4回の人子ども食堂へほとんど毎回参加している人が2番目に多かった。しかしパーセンテージでそれぞれを比較した場合、子ども食堂の参加が高いのは、お子さんと遊ぶ機会が週に1~2回に次いで、めったにない・週に3~4回が多いことが分かった。

また、2か月に1回・半年に1回・1年に1回程度と参加頻度が低い割合が最も高かったのは、ほぼ毎日お子さんと遊ぶ機会がある人であった。

下記の図10では、お子さんに知能や技能を教える機会(勉強や料理など)が週に1~2回するとき、子ども食堂にほとんど毎回参加する人が33人と最も多かった。次に、25人で月に1~3回の場合が多かった。しかしパーセンテージでそれぞれを比較した場合、お子さんに知能や技能を教える機会がほぼ毎日・月に1~3回の場合がほぼ同率で参加頻度が高い結果となった。

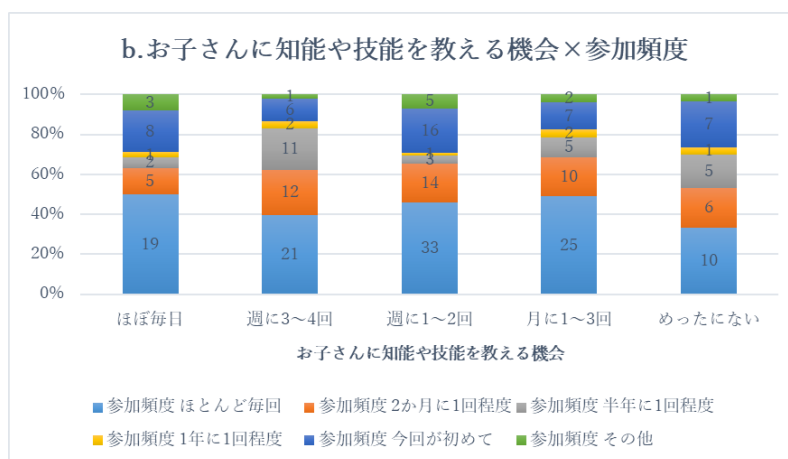


図10 (N=244 欠損値64)

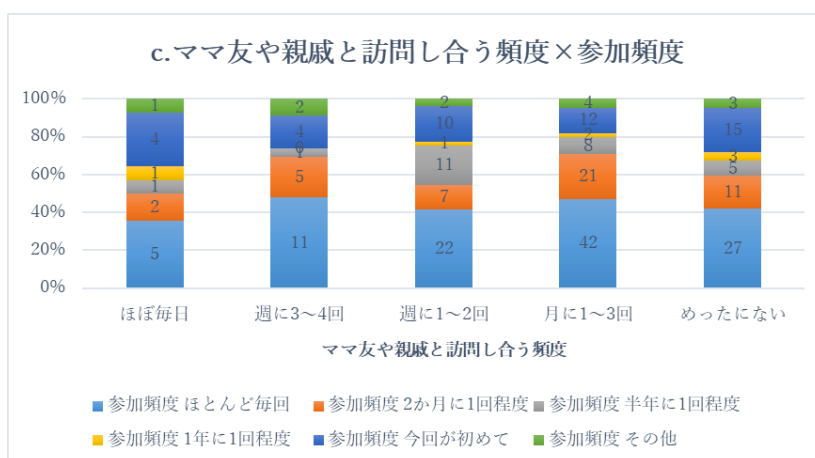


図11 (N=243 欠損値65)

上記の図11から、お子さんと同じくらいの年齢の子どもを持つ友人(ママ友)や親戚と

訪問し合う頻度が月の1~3回の場合、子ども食堂にほとんど毎回参加している人数42人と最も多かった。しかしパーセンテージでそれぞれを比較した場合には、参加頻度が多いのは、ママ友や親戚と訪問し合う頻度が週に3~4回・月に1~3回の場合が高いことが分かった。図9と比較すると、全体的にそれほど差がない結果となった。

下記の図12から、お父さん（または父親代わりとなる人）の育児に参加する頻度が週に1~2回の場合、子ども食堂にほとんど毎回参加している人が32人と最も多かった。割合でも、最も高かった。人数で見ると、お父さんがほぼ毎日育児に参加する場合、子ども食堂への参加頻度が29人で2番目に多いことが分かった。

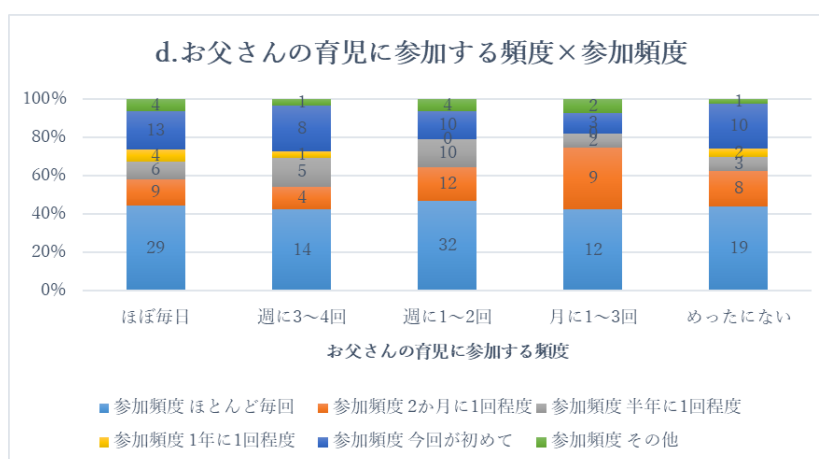


図12 (N=233 欠損値75)

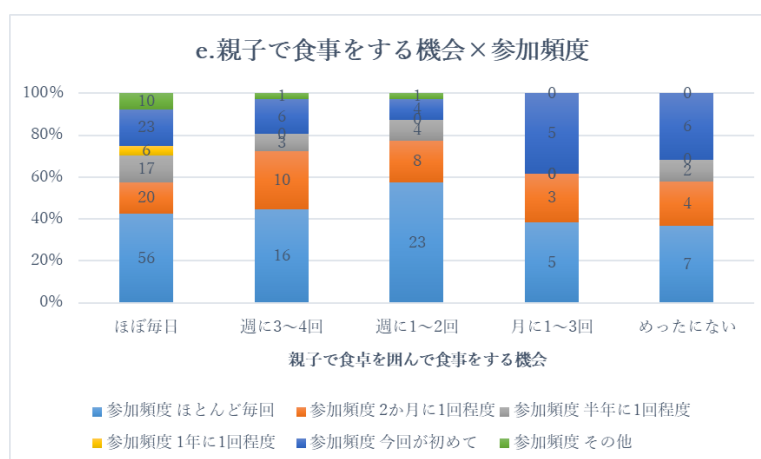


図13 (N=240 欠損値68)

上記の図13から、人数で比較すると、お子さんが両親（または母親、父親代わりとなる人）と一緒に食卓を囲んで食べる機会がほぼ毎日ある場合、ほとんど毎回子ども食堂に参加している人が56人で最も多かった。次いで、親子で一緒に食事をする機会が週に1~2回の場合が23人で2番目に多かった。しかしパーセンテージでそれぞれを比較すると、親子で一緒に食卓を囲んで食べる機会が週に1~2回の場合が最も子ども食堂の参加頻度が高いことが分かった。次いで参加頻度が高かったのは、親子で食事をする機会が週に3

～4回であった。ほぼ毎日親子で食事をする人は、3番目に参加頻度が高い結果となった。

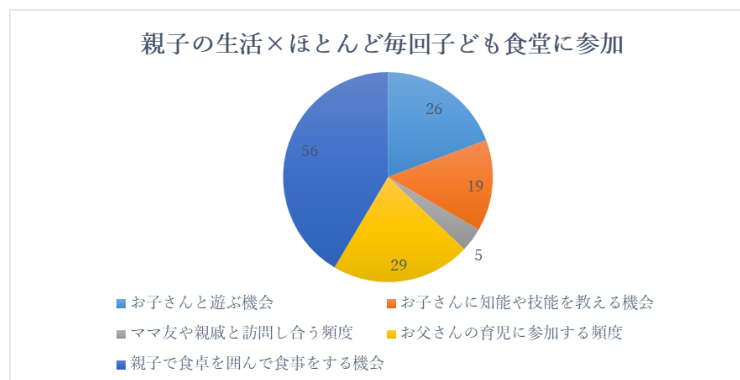


図 14 (N=135)

上記の図 14 は、子ども食堂にほとんど毎回参加している人の家庭での親子の生活の割合を示したものである。その結果、親子で食卓を囲んで食事をする機会が多い親子ほど子ども食堂への参加頻度が多かった。次に、お父さん（または父親代わりとなる人）が育児に参加する頻度、お子さんと遊ぶ（趣味・スポーツ・ゲームなど）機会が多い結果になった。これらの2つには、それほど差がなかった。一方、最も少なかったのは、ママ友（お子さんと同じくらいの年齢の子どもを持つ友人）や親戚と訪問し合う頻度であった。

第4章 今後、より多くの人に継続して利用してもらうために

第3章までのアンケート調査の分析結果をふまえた上で、今後の子ども食堂を満足して継続的に利用してもらうための取り組みを2つ考察した。

①レクリエーションや遊び場となるスペースの充実

子どもたちが子ども食堂に来る目的として、食事の他に友だちと会えることやスタッフとの会話を楽しみにしていることが分かった。これらから、子どもたちが食事の他に楽しめることがあれば良いと考えた。また、運営スタッフが企画するレクリエーションだけでなく、子ども同士が遊べるスペースがあればもっと楽しんでもらえるのではないかと考えた。また、赤ちゃんが遊べるスペースも少しあると良いと思う。お母さんたちがゆっくりと食事をし、安心して居られる空間があると良いと感じた。以下では、自身のボランティア経験を食事・レクリエーションに注目して紹介する。

なかぶん（名古屋市中区）

食事だけでなくレクリエーションにも力を入れる子ども食堂

■場所

場所は中文化センターの2階で開催している。小学校の調理場のようなところを使っている。そこで働く職員の方も子ども食堂が開催される日は、ごはんを食べている。

■曜日・時間

毎月第3土曜日 11時半から13時

■食事

ごはんは調理師の資格を持つスタッフの方が作っている。

全体のバランスが良く、量もちょうど良い。小学校の給食を作っているスタッフの方が作られているので、子どもも大人も食べやすい味と量であった。栄養バランスも考えられている。

■レクリエーション

レクリエーション担当のスタッフの方が毎月、子どもたちが喜ぶことを考えて毎回行っている。

■宣伝

Facebook に使った食材の産地を載せて、情報を発信している。また、野菜の栄養素の豆知識などを掲載したチラシも配布している。

こちらの子ども食堂では、子どもだけでも来られる気軽な食堂を目指している。子どもたちにごはんを食べてもらうことが本来の目的であるため、大人だけの利用は断っている。

おいしいごはんを提供するほかに、レクリエーションにも力を入れている。

ごはんは、小学校の給食のようでとても懐かしく感じた。ごはんはシンプルなメニューで、とても食べやすいと感じた。小学校の給食を思い出させてくれる食事であった。とても賑やかな子ども食堂であった。

また、Facebook で来月のメニューや催し物の情報を発信しているため、周囲がその情報を早くに知ることができる。そのため、初めての来る人も毎回来ている人も行きやすい場所であると感じた。

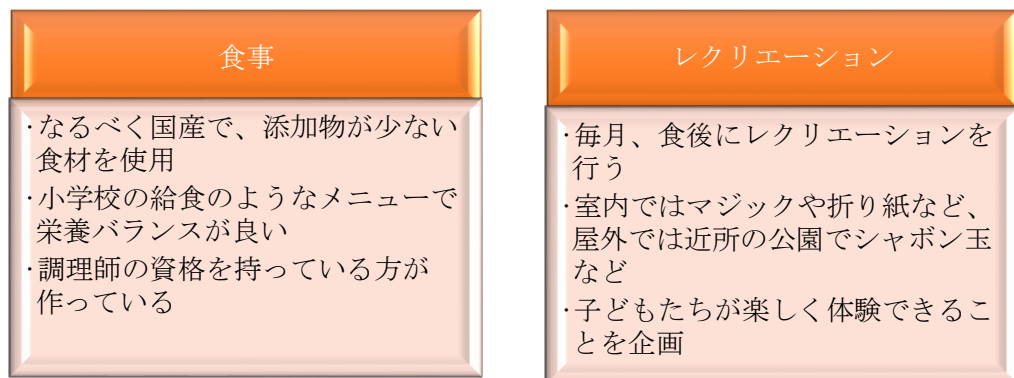


図 15

②相談相手

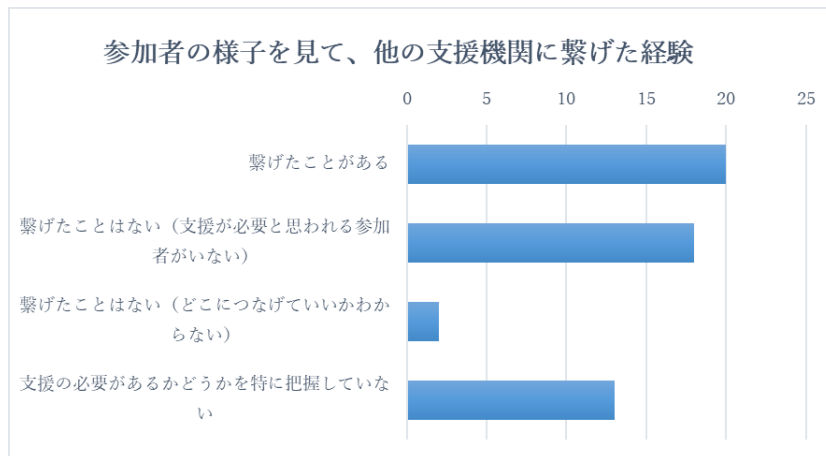


図 16 (N=59)

参加者を他の機関に繋がったことがある子ども食堂は 59 か所ある中で 20 か所存在した。どこに繋がっていいかわからず、他の機関に繋がったことがない子ども食堂が 2 か所あった。

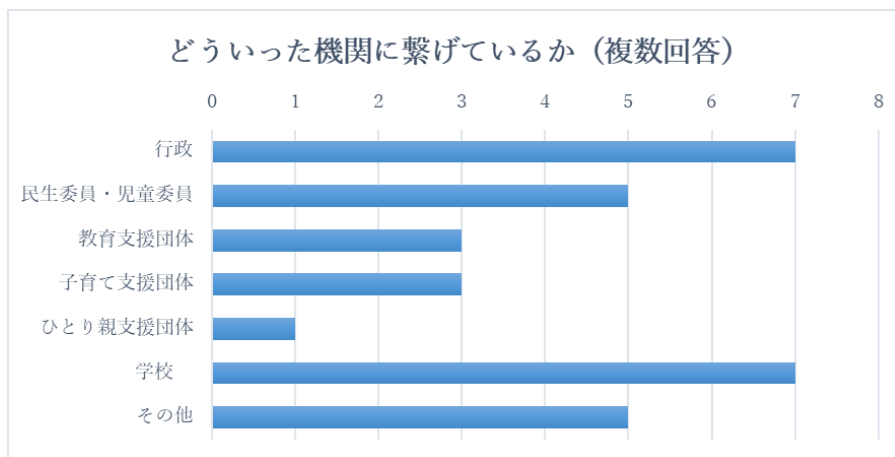


図 17 (N=59)

子ども食堂が繋がった機関として最も多かったのは行政・学校であった。次いで、民生委員・児童委員が多かった。ひとり親支援団体に繋がった子ども食堂は最も少ない結果になった。ひとり親世帯が実際にどのくらい来ているのかは分からない。

名古屋市で母子世帯の数は 25,986 世帯、父子世帯の数は 2,973 世帯になる。ひとり親世帯になった一番多い理由は、離婚だった。また母子世帯では、未婚がひとり親になった理由とされているのが 13.6%になる。就業状況では、母子世帯・父子世帯ともに 9 割以上で高かった。

ひとり親世帯ⁱⁱⁱの親の年齢で最も多い年代は、母子世帯・父子世帯ともに 40 代が最も高かった。子どもの平均人数では、母子世帯が 1.69 人、父子世帯が 1.77 人であった。

	母子世帯	父子世帯
困っていることがある	子どもの教育や将来：59.2% 生活費：51.7% 仕事：27.5%	子どもの教育や将来：48.1% 生活費：33.3% 家事：26.9%
雇用形態	正規採用：41.8% アルバイト・パート：41.8% 契約社員：7.9%	正規採用：88.2% アルバイト・パート：3.9% 契約社員：2.6%
子どもについての悩み	教育・進学：67.5% しつけ：30.9% 育児：19.2%	教育・進学：63.7% しつけ：29.8% 就職：19.4%
生活の悩み	精神的にゆとりがない：39.3% 仕事が忙しく、子どもとの時間が少ない：33.3% 仕事が忙しく、家事が回らない：32.6%	精神的にゆとりがない：33.3% 仕事が忙しく、子どもとの時間が少ない：31.4% 仕事が忙しく、家事が回らない：30.5%
期待すること	相談事業の充実：69.4% 経済的支援の充実：31.0% 子どもの学習・教育支援：16.6%	相談事業の充実：73.1% 経済的支援の充実：22.1% 企業がひとり親世帯に対する理解を深めるための啓発活動の充実：10.6%

表 1^{iv}

上記の表 1 で、母子世帯・父子世帯ともに生活費に困っていることは、子どもの教育や将来の次に多い。生活費の中には食費が含まれる。子ども食堂は月に 1 回程度の開催ではあるが、多少でも困っている人の力になることができる。

また、母子世帯・父子世帯ともに相談事業の充実が圧倒的に多かった。子どもが家庭や学校における問題を抵抗なく相談できる場を設けることが有効かもしれない。具体的な方法の 1 つとして電話相談事業がある。チャイルドライン（NPO 法人チャイルドライン支援センター）や自治体が行う様々な育児相談がある。しかし、電話相談は多くが「傾聴」に終わってしまう問題がある。話をきいてもらうことは重要なことであるが、そこから必要な支援へと結びつける機動性が必要である。だからこそ、直接話を聞く環境があれば良いと考えた。子ども食堂を運営する側ができる取り組みとして次のことをあげる。

親への支援

- ・ 育児相談
- ・ 心身の問題に関する支援
- ・ 子育てをする父親や母親の交流
- ・ 食育プログラム

子どもへの支援

- ・学習支援
- ・不登校の子どもへのカウンセリング
- ・メンター（1対1の大人の相談相手プログラム）

第5章 おわりに

子ども食堂に来る人たちは、ほとんど毎回利用している人が大半を占めている。そして参加頻度が多い子どもは、友だちに会えることを目的としている割合が高いことが分かった。子どもたちはおいしいごはんが食べられることよりも友だちに会えることを楽しみにして来ているということが分かった。一方、子ども食堂の参加頻度が多い大人は、家事を休む事ができるからという理由で来ていることが分かった。ママ友など子育てをしている人との交流ができるという点も参加を促す要因であることが分かった。また、家庭での親子の関係と子ども食堂への参加頻度では、お子さんと遊ぶ機会・勉強を教える機会・お父さんが育児をする機会・親子で食事をする機会が週に1~2回するとき、子ども食堂への参加頻度が高い結果となった。ママ友や親戚と訪問し合う頻度は週に3~4回するとき、子ども食堂への参加頻度が高いことが分かった。これらは全て子ども食堂への参加を促す要因であることが明らかになった。ほとんど毎回参加している場合だけで比較すると、最も多い要因は親子で食卓を囲んで食べる機会が約4割で最も多かった。それだけ親子と一緒に食事をするのが重要であると分かる。それぞれの親子の機会の頻度が子ども食堂の参加頻度と関連があった。

これらのことから、子どもはごはんだけでなく、友だちとの交流を求めている。そして大人は、自らの憩いの場・子どもと過ごす時間・成長につながることを求めて子ども食堂を利用しているということができる。それらの参加頻度の要因から、子ども食堂にできる取り組みとして、レクリエーションの充実や相談できる場を設けることをいくつかあげた。おいしいごはんを提供することが子ども食堂のメインである。しかし、子どもや親子で参加する子ども食堂では、また一歩進んだ取り組みが必要となっていると感じられる。

【参考文献】

- 子どもの貧困Ⅱ 一解決策を考える 阿部彩 2017年7月
i 子ども食堂の現状と課題 NPOカタリバ 2017年11月
(<https://www.katariba.or.jp/news/2017/11/02/9882/>)
ii むすびえ NPO法人 全国子ども食堂支援センター 2019年6月
(<https://musubie.org/news/993/>)
iii 平成25年度ひとり親世帯等実態調査結果の概要
iv 名古屋市HP 市政情報 平成25年9月
(www.city.nagoya.jp/kodomoseishonen/cmsfiles/contents/0000058/58920/25hitorioyajittaichousakehitorioyaji.pdf)